



○「生物多様性」

成人式を「20歳の集い」として行っている自治体が多くなりました。これは、成年年齢が18歳に引き下げられた影響です。私は、大学入学時に大学のある地に住民票を移したこともあって、高知市で20歳の成人式に出席しました。その時に記念品としてもらったメダルに、高知の生んだ偉人として刻まれていたのが牧野富太郎博士でした。坂本竜馬とかではなく、牧野富太郎。もらった時は正直そこまでのありがたみを感じませんでした。その後、牧野富太郎博士の事を調べ、人間性や功績の偉大さを知り、今でもメダルを大事にしています。



大学入学後しばらくしてから高知市郊外にある牧野植物園を訪れました。植物一つひとつに名前がつけられていることがあたりまえでなく、牧野富太郎博士はもちろん先人たちの努力の賜物であることや名前があることの意義にはずいぶんあとから気づきました。

日本の植物分類学の父とされる牧野富太郎博士は、現在放映されているNHKの朝ドラ『らんまん』の主人公のモデルです。1500種以上の植物を命名するなど、日本の植物分類学の発展に貢献されました。この植物が何なのか、何と呼ばれる植物なのか、ほかの植物との関係はどうなのかを知らなければ、植物を保全していくことはできません。人類を含めた多くの生命にとって欠かすことの出来ない命の土台が生物（動植物）の多様性です。地球上において、自分一人、ただ一種だけで生きていくことはできません。多様性を維持する上で植物の保全は大事なことです。

ドラマで描かれる博士の研鑽を積む姿やあきらめない姿、植物学にかける情熱に刺激を受ける人も多いと思います。それは博士に「**大きな志**」があったからに違いありません。日々の努力と研鑽というあたりまえのことをあたりまえにする「**小さな挑戦**」を積み重ねた結果だと思います。

そんな博士が残したとされるもっとも有名な言葉が「雑草という名の草はない」です。ドラマの中でも出てきた言葉です。雑草には、どこかマイナスのイメージがあります。今の時季たくましく伸びていく野生の草花が「雑草」の名前で呼ばれるのは、それが「余計なもの」「やっかいなもの」と思われている一面があるからでしょう。すべての草花に名前があり、それぞれの役割や存在意義があります。人間にもそれぞれ名前があり個性があり役割も存在意義もあります。一人ひとりを尊重する社会は平和な社会と言えます。博士の言葉に「人間に思い遣りの心があれば、天下は泰平で、喧嘩も無ければ戦争も起るまい。故に私は是非とも草木に愛を持つ事をわが国民にすすめたい。」というのがあります。「**小さな気遣い**」、思いやりの心を一人ひとりが持つことが、平和な社会への第一歩であり、個を尊重し様々な価値観を共有する多様性社会だと思っています。